

日本ヘーゲル学会 第16回研究大会プログラム

2012年12月22日(土)

於：関東学院大学・横浜関内メディアセンター

発表会場：M-803

会員控え室：M-804

懇親会会場：Café & Kitchen 333 (横浜市中区弁天通 2-28 2F)

Tel 045-663-7998

開催校責任者連絡先

〒236-8503

神奈川県横浜市金沢区六浦東1-50-1

関東学院大学人間環境学部

杉田正樹 (msugita@kanto-gakuin.ac.jp)

..... 個人研究発表 10時30分～12時

「命題形式と事柄の形式（実在的可能性をめぐる形而上学）」10時30分～11時15分

発表者：木本周平（首都大学東京）

司会：山田有希子（宇都宮大学）

「生の論理と論理の生：生命章における概念論主観態の成就と 11時15分～12時

生の自己規定としての *Verhalten*」

発表者：池田透（ベルリン自由大学）

司会：杉田正樹（関東学院大学）

～～ 休憩 12時～13時 ～～

..... 個人研究発表 13時～14時30分

「ヘーゲル哲学における知の主体性と本質について 13時～13時45分
—本質の映現をもとにして—」

発表者：嶺岸佑亮（東北大学）
司 会：伊坂青司（神奈川大学）

「『精神現象学』における「啓示宗教」の意義について 13時45分～14時30分
発表者：矢島義英（同志社大学）
司 会：伊坂青司（神奈川大学）

～ 憩 14時30分～14時40分 ～

..... シンポジウム 14時40分～17時40分

「ヘーゲル『大論理学』の意味について——カントの超越論的論理学との対立から」

提題者： 山根雄一郎（大東文化大学）「批判と形而上学のあいだ」
山内 廣隆（広島大学）「イエナ——ヘーゲル哲学の揺りかご」
牧野 広義（阪南大学）「ヘーゲル論理学と矛盾・主体・自由」
司 会： 海老澤善一（愛知大学）

◆ ◆ 臨時総会 17時40分～18時 ◆ ◆

◆ ◆ 懇親会 18時～20時 ◆ ◆

会場：Café & Kitchen 333
会費：一般4,000円、院生3,000円

◆ ◆ 理事会 12月23日（日）10時～12時30分 ◆ ◆

会場：東京工業大学キャンパス・イノベーションセンター 2F

多目的室1

命題形式と事柄の形式 (実在的可能性をめぐる形而上学)

木本周平 (首都大学東京)

本発表はヘーゲルにおける実在的可能性概念をドイツ啓蒙哲学の系譜の中で考察し、それと密接に関連があると思われる形而上学的諸問題、とりわけ「事柄 (die Sache)」という従来注目されていない概念を論じる。

『大論理学』での可能性概念は、その直前で「絶対者」「属性」「様相」というスピノザに由来する三つの概念が再構成されていることからわかるように、スピノザ的必然主義に対する批判的含意を読み込むことが可能であると一応いうことができる。必然主義へのヘーゲルの立場は、一方でスピノザ的一元論を存在論のレベルでは受け入れ (可能世界を認めない)、他方で体系内に可能性と偶然性をその契機として組み込むことで因果的決定論から距離を置くことにある。

ただスピノザ主義との対決は体系全体に関わる大きな文脈であり、ヘーゲルの様相概念の固有性を考察するには適切ではない。そこで『大論理学』における様相述語それぞれの規定を詳しく見てみると、それらがヴォルフ学派の伝統を一定の仕方で踏襲しているのがわかる。たしかに『小論理学』では、可能性を無矛盾性として与える立場が批判されており、ここにヘーゲルのヴォルフ哲学への批判的態度を読み取ることは妥当だろう。だが無矛盾性形式の可能性概念を筆頭に伝統的な様相概念はヘーゲルの体系内においても一定の機能を果たしており、両者に歴史的連続性がないわけではない。

興味深いことに「実在的可能性」の概念には両者の概念的継承が見て取れるように思われる。実在的可能性とは、それ自身が現実的でありながら別の事象の条件を構成することで、同時に可能性としてもあるものであるが、ここでは実在的なもの相互の両立可能性が主題となる。つまりここには存在者の内的な可能性を問題とする「それ自身における可能性 *possibilitas in se*」に留まらない問題が含まれているのだが、こうした「事物相互の両立可能性 *compossibilitas rei*」という概念がヴォルフの体系に本質的な仕方で組み込まれていることを考慮すると、両者の系譜は十分に検討する価値があるだろう。以上が考察したい第一の論点である。

第二の論点として、「事柄」の概念を取り上げたい。「事柄そのものとは可能的であるとともに現実的なものでもあると規定される内容である」と言われる。したがって、事柄は現実化に先立って与えられる可能的なものであるということが出来る。本論ではまず可能的なものとしての事柄の性格に注目したい。さらに事柄と合わせて言及される内容という形式である。ヘーゲルは形式的可能性を論じる際にも可能性が持つ「内容に関する措定された形式規定」から選言的可能性を導出するが、その際、内容についての形式として単なる自己同一性形式ではなく、意味内容を表現できる命題形式を考えていると思われる。というのも可能性の選言的形式は否定の演算子をつけられる形式を前提としており、命題 A とその否定 $\neg A$ を共に可能とするからである (この時 A を存在者と解釈することはできない)。こうした事情には、存在者の領域を規定するために可能性概念を用いるヴォルフ的「存在論」から距離をとり、可能性の領域を事柄、つまり意味内容をもつ形式によって表現される対象を主題化しようとするヘーゲルの態度が表れている。本論ではこうした命題形式と可能性形式の関係を論じることで、概念史的な枠組みの中におけるヘーゲルの独自性を明らかにしたい。

生の論理と論理の生：生命章における概念論主観態の成就と生の自己規定しての *Verhalten*

池田 透 (ベルリン自由大学)

本稿が扱う内容は二つある。第一のそれは『論理学』における生命章の三つの節で扱われる対象、すなわち魂と有機体のあいだの心身関係、生命過程そして類を、概念論理学主観態理論の客体における成就形態として解釈することで、生命が十全な意味での真理である根拠をあきらかにすること。

第二のそれは、生命が概念の自己規定の成就である所以を、生命個体の自己および他者に対する関わり [*Verhalten*] という、概念の自己限定、様態化における視点から解明することである。

生命章は、直接無媒介な理念として先行する目的論と密接な論理的連関がある。それは両者が、目的-手段連関において外的・内的という相違があるものの、目的論という共通の理論構成を共有しているからである。

本稿は、目的論における概念としての目的・手段・遂行された目的という諸契機が、生命論における魂と有機体・生命過程における個体の再生産の論理・類過程における個体間の差異（性差）にもとづく関係と新たな個体の生産を通じた類の実現という問題へと転位されつつ、概念・判断・推理という概念論主観態の論理を、概念の自己規定をつうじて客体に実現している経緯を解明する。

さらに、生命における概念が魂とその相関項である有機体に具現される以上、魂は生の維持という目的の観点にもとづき自己外の対象との関係を様々な境位でもつこととなる。この自己規定の様態を生きた個体の自己および他なる個体への関わり [*verhalten*] の様式として読解することを通じて、生における概念の自己規定の特異性を解明する。

ヘーゲル哲学における本質と知の主体性について□ 本質の映現をもとにして□

嶺岸佑亮 (東北大学)

ヘーゲルの哲学的思索にとって、知はイエーナ期の『差異論文』以来、その根幹を担う役割を占めてきた。そのことは、『精神現象学』の末尾を飾る絶対知のみならず、もう一つの主著である『大論理学』も「純粋な知 *das reine Wissen*」(GW11,33)の展開であることを鑑みれば明らかである。この知と並んで重要なモチーフとなるものとして、主体性が挙げられる。すなわち、自ら或る一定のプロセスを担い、このプロセスを辿る中で自らを規定し、更に、この規定を通して自らを意識するというようにして、主体性は自立的である。知と主体性の両者は、決して全く別々のもの、無関係なものではない。というのも、知の終局は、知がそれ自身を知ることにあるからであり、従って、知の真の対象とは自ら自身に他ならず、知はそれ自身において完結しており、やはりある意味で自立的であるからである。そうであるならば、知それ自身が主体となって自らを知る、という一つのプロセスをなしている、ということが出来よう。

ところで、このような本質は自らをその本質において、本質のままに知るはずである。しかし、自立的で、自らのもとにとどまり続けるようなものが、自ら自身の本質に対していったいどのように関わるのであろうか。また、この本質は、極めて独特なものであることになるが、それは主体にとって、しかもまさにその本質として一体どのようにして明らかになるのであろうか。

こうした問題を考えるにあたって鍵となるのが、『大論理学』の「本質論」における「本質のそれ自身における映現すること」(GW11,249)である。この「映現」という、独特なモチーフのうちには、本質とはその本性からして自らを顕わすものとして運動するものである、ということが内包されている。ここで言われる本質が、何らか任意のものではなくて、「純粋な知」のそれであることを踏まえるならば、知においては、本質と、この本質によって存在するもの、すなわち、一定のプロセスにおいて本質がそれへと顕わにされる場所のものとの関係が極めて際立ったものであることが分かる。

本発表では、以上の問題を解明するために、主として『大論理学』「本質論」や、また「概念論」における概念の生成や主体性についての議論、「存在論」(1812年の初版)における始原としての純粋な知についての問題等を考察しながら、『大論理学』における知の性格をより明確なものとするために、『差異論文』や、『精神現象学』の序文、絶対知の章での知の位置付けも押さえつつ考察していく。

『精神現象学』における「啓示宗教」の意義について

矢島義英 (同志社大学)

本発表の課題は、『精神現象学』の「VII 宗教」章の「C 啓示宗教」の議論を考察することによって、「精神の自己意識」としての宗教が持つ構造を解明することにある。

「啓示宗教」はキリスト教の受肉の思想に依拠して、「神的本質が自分について自分が精神であるという意識をもつ」(GW9, 405)ことへの到達を目指し運動を展開する。この運動は、教団の宗教的意識が「純粹思惟」、「表象」、「自己意識」という三つの境位を経ながら、「啓示宗教」が提示する神と人の同一性という理念を重層的に深化させていくとともに、その同一性、すなわち精神という構造を自らに内化、体現していくことによって実現される。その際、特に重要となるのが神人であるイエスの「贖罪」による死である。この死は、神的本質の外化によって出現した神人が、「贖罪」の死を通じてこの外化をさらに否定して神的本質に還帰する運動を表現しており、この死によって神と人の融和が達成されるとともに、実体が主体として実在化するからである。そして、このような精神の実現を請け負うのが教団の宗教的意識による「聖餐」である。「聖餐」によって、宗教的意識はイエスの自己犠牲的な死による神と人の融和を掴み取り、イエスの自然的な死が教団のうちに生きる普遍的精神に変容する。そして、このことは、神人であるイエスの贖罪の死が完成しない限りで、人に対立していた神的本質が消失することを意味するがゆえに、「啓示宗教」の運動を通じて実体が主体となり、「自己自身を知る精神」(GW9, 419)が実現することになる。

しかし、このような積極的な評価がされる一方で、「啓示宗教」がそれ固有の限界を持つことも指摘される。宗教的意識は、実現された神と人の融和を、イエスのみに可能な特殊事例としてしか捉えないがゆえに、宗教的意識自身には此岸と彼岸の対立が持続したままだからである。この融和の自覚を阻むのが、融和を自分の前に立て、自分に疎遠な外的なものとして捉えてしまう宗教固有の「表象」という態度である。こうして、「啓示宗教」によって、「自己自身を知る精神」が実現したとされる一方で、結局宗教は表象に留まらざるをえず、絶対的精神の実在化は概念把握である「絶対知」を俟つとされる。

このように曖昧に映る「啓示宗教」の成果が、「精神の自己意識」としての宗教の意義を疑わしいものになっている。そこで本発表では、宗教における自己意識の成立要件を自己という構造に着目して解明する。表象を根本規定とする宗教は、自らの対象である精神を概念把握のように「自己」として「知る」ことはできない。しかし、「精神の自己意識」によって実現されている「自己」の意識は表象においても成立している。この表象の境位で可能となる「精神の自己意識」がいかなるものかが問われねばならない。ここで注目されるのが、宗教が「絶対的内容」(GW9, 426)を持つとされる点である。この点から、この「内容」の絶対性が、表象における「精神の自己意識」を可能にしていると考えられる。「啓示宗教」で展開される議論に即してこの「内容」を解明しつつ、宗教の持つ「精神の自己意識」の構造を明確化することで、「啓示宗教」の本質的な意義が獲得される。

批判と形而上学のあいだ

山根 雄一郎 (大東文化大学)

周知のように、第一批判(1781/87)の「超越論的論理学」は、「超越論的分析論」と「超越論的弁証論」の2部からなる。カント(1724-1804)は、まず前者において、従来の形而上学の第一部(存在論。いわゆる一般形而上学)を、数学的・力学的世界像を基礎づける「真理の論理学」として再生し、この「成果の真理性の検算」[B XX]の形で、引き続き後者において、形而上学の第二部(特殊形而上学)がこれまで論じてきた霊魂・世界・神といった事柄(「理念」)に関する言明は、実は学的な知識とは言えない「仮象」に他ならないことを、すなわち後者が「仮象の論理学」たらざるを得ない所以を、暴露した。カントは、第一批判のこの結論を踏まえて、「自然の形而上学」と「道徳の形而上学」という2本立ての形而上学構想を追究し、少なくとも公刊された著作の範囲内では、「実践的定説的形而上学」(Heimsoeth)と形容される境位に行き着いたと見られる。

カントにとって「超越論的弁証論」は専ら思弁的理性の限界を露にする議論であった。他方でヘーゲル(1770-1831)は、「超越論的弁証論」の第二篇で定式化される、相対立する主張が同等の根拠をもって成り立つ「二律背反」を、いわゆるイェナ期(1801-07)以降、むしろ「知と真理の最高の形式的表現」として積極的に受け止める。二律背反という事態をカントが消極的に評価するのは、知らないし真理というものを、固定的に捉えているから、つまり専ら「悟性」による知として理解しているからである、というわけであろう。

とは言え、ヘーゲルの考えるように、知や真理を固定的に理解すべきでないとするならば、「超越論的論理学」に評価を下す彼自身の姿勢が問われることにもなるであろう。なるほど彼は、1801年以降、二律背反論との対決を通じて、カントを乗り越える新たな形而上学の構想を、すなわち論理学の構想を深めたにしても、その際に念頭に置かれていた「超越論的論理学」とは、端的に第一批判におけるその記述だったのだろうか。それは『大論理学』初版から振り返るなら優に一世代前の思想である。カントは『プロレゴメナ』(1783)以来、「超越論的論理学」の再叙述ないし弁明を再三試みているが、思想のこうした彫琢過程は、総じて不問に付されたのだろうか。もしそうであるとすれば、そうした「超越論的論理学」理解は、まさしく型どおりの固定的理解にとどまるという意味で、つまりヘーゲル自身が批判する意味で、そもそも問題だと言わざるを得ないのではないだろうか。

カントは1790年春に、数年来ヴォルフ派講壇哲学の立場から加えられてきた攻撃に対する論駁書を上梓し、「超越論的論理学」思想の弁明を行う。ヘーゲルがテュービンゲン神学院の哲学課程を了える4ヶ月前のことである。哲学課程時代(1788-90)の彼のカント哲学への反応は詳らかでないが、反カント陣営のカント理解はフラット(1759-1821)による形而上学講義を通じてヘーゲルにも伝わった。他方、「超越論的論理学」(実質は批判的認識論)に関してカント自身が強調しようとした要素は、カント批判の動向への彼自身の応接から確認できる。当然、両者の間には落差がある。当時のテュービンゲンの状況にも注意しながらこの点に分け入り、批判哲学とヘーゲルの来るべき論理学思想とのあり得る接点を探ることで、「カントの超越論的論理学との対立から」「ヘーゲル『大論理学』の意味について」考える本シンポジウムにおける、カント研究の立場からの提題としたい。

イエナ—ヘーゲル哲学の揺りかご

山内廣隆 (広島大学)

今回のシンポジウムは、ヘーゲル『大論理学』をカントの超越論的論理学の発展として、哲学史を踏まえて明らかにしようとするものである。企画委員会から私に与えられた課題は、カントとヘーゲルを繋ぐカント以降の哲学史に目配りしながら、『大論理学』の前庭を掃除してくれというものである。この課題については、私の少し前の仕事（『ヘーゲル哲学体系への胎動—フィヒテからヘーゲルへ』ナカニシヤ出版、2003年）があるので、それを基本にして報告したい。

周知のように、ドイツ観念論の直線的発展史観は一般に流布され承認されてもいるが、まずこれについて論評する。次に、カントの問題意識を引き継ぎ、ドイツ観念論の礎を築いたフィヒテと、フィヒテを継承しようとしたシェリングとの齟齬について触れる。このような両者の関係を引き継いだのがヘーゲルであるが、彼が前二者、とりわけフィヒテ哲学をどのように引き継ぎ、また批判したのかを、まずはスピノザ評価を巡って論じる。

一般的には、ヘーゲルはイエナ期にフィヒテ哲学を批判的に「乗り越えていった」と言われる。しかし、筆者は、ヘーゲルはフィヒテ哲学を批判的に「摂取していった」と考える。ヘーゲルのイエナ期とはその過程であり、その出発点を画するのが『差異論文』である。まず、シェリングへの関係に留意しながら、『差異論文』におけるヘーゲルの基本的フィヒテ理解を明らかにする。その後、『差異論文』におけるヘーゲルのフィヒテ批判について言及する。『差異論文』でヘーゲルは、まさしくカント、フィヒテ、シェリングから流れ出た哲学的アポリアを「意識に対して絶対者を構成すること」として設えなおしている。そしてまさしくドイツ観念論的この難問に対して、ヘーゲルが『差異論文』の時点でいかなる解決策を持ち合わせていたかを論じる。

ヘーゲルのフィヒテ受容を通してのヘーゲル哲学体系の発展は、政治哲学的側面に如実に現れてくる。すなわち、二つのイエナ『精神哲学』の構成上の相違、つまり近代市民社会の評価の仕方の相違となって現れてくる。

イエナ期ヘーゲル哲学の発展は、フィヒテからの「眼のないポリュペモス」（反省の欠如）としてのシェリング・ヘーゲル批判をヘーゲルが受容し、自己の哲学体系形成のバネとなしていく過程である。最後に、我々はこの過程をイエナ「論理学」とイエナ「形而上学」の関係の在り方の変化として述べると同時に、その変化をヘーゲルの「根拠律」理解の深まりとして語るつもりである。

ヘーゲル論理学と矛盾・主体・自由

牧野広義 (阪南大学)

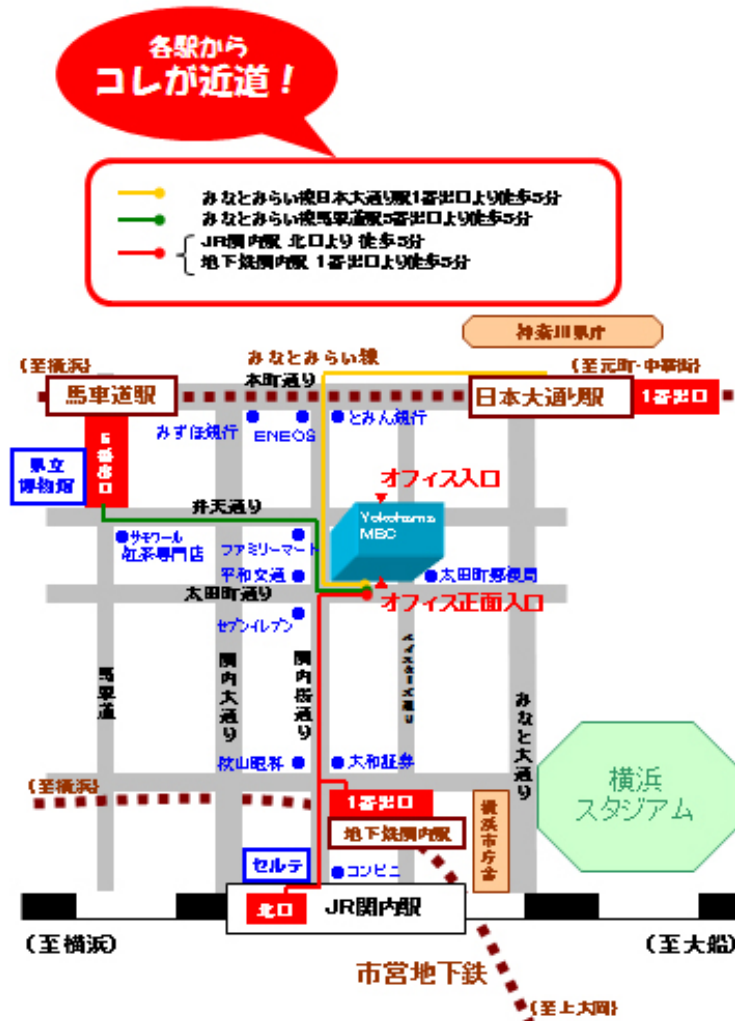
ヘーゲルの『大論理学』および『小論理学』をテキストとして、ヘーゲル論理学の意味を考えたい。ヘーゲル論理学は、アリストテレス以来の形式論理学を改作し、カントの超越論的論理学を超克する新しい論理学の樹立を目論むものである。それは、弁証法的なカテゴリー体系によって「本来の形而上学」を構築するとともに、哲学の方法論を提示する。

このようなヘーゲル論理学において、第一に注目されるのは、「矛盾」の論理である。ヘーゲル論理学における「矛盾」は、カントのアンチノミーから積極的な意義を引き出し、カテゴリーの相互否定と自己否定からより高次のカテゴリーを創発させるものである。こうして、「矛盾」がすべての自己運動と活動性の源泉となることが示される。「有論」での移行の論理では「有限」と「無限」における矛盾など、「本質論」での反省の論理では「矛盾」のカテゴリーなど、「概念論」における発展の論理では「判断」(根源的分割)における矛盾などのように、それぞれの論理のレベルにおける「矛盾」が論じられる。こうして、各カテゴリーにおいて、不可分な契機の相互前提と相互否定によって、自立的に存立するものの自己否定が示され、ここから新たな規定への移行、反省、発展が論じられる。そのような自己運動と活動性の源泉がヘーゲル論理学における「矛盾」である。それが思考における論理的矛盾としても実在における現実的矛盾としても現象するのである。

第二は、「主体」の論理である。「真なるものを、実体としてではなく、まさに同様に主体として把握し、表現すること」(『精神の現象学』「序文」)がヘーゲル論理学の中で遂行される。それは、論理学が同時に形而上学として、「有」・「本質」・「概念」という実在の論理を通じて、「主体」の論理を発生的に叙述することである。「有論」では「対自有」が自立的に有るものの論理を示すが、それは他者への関係を欠落させて自己関係に帰着する。「本質論」では他者との関係の中で自己関係を形成する論理が示され、「実体」とその因果関係や相互作用の論理が展開される。しかしそれは必然性ないし強制力の論理にとどまる。「概念論」において「主体」とその自由な発展の論理が提示される。すなわち、「概念」の根源的分割から有機的統一を構成する「推理」が「主体」の構造を提示し、また「客観性」や「理念」では「主体」と「客体」との関係とともに、「主体」相互の関係をくりあげる「主体」自身の論理が提示される。このような「主体」が自由の担い手となるのである。

第三は、上記のように、「必然性」の論理から、それを踏まえた「自由」の論理が提示されることである。「自由」はヘーゲル哲学の核心をなす概念である。ヘーゲル論理学は哲学体系の基礎である形而上学であり、方法論でもあるという意味で、ここでは「自由」の論理構造が提示される。自由とは、「他のものの中にありながら、ただ自己とのみ同一なもの」として自己を定立することである。この論理は、「概念」における普遍・特殊・個別の統一による自己決定の論理、「目的論」における外的合目的性による目的の実現、「善の理念」における実践的理念などを通して示される。ヘーゲル論理学における「自由」は、他者との関係性を形成しながら自己実現を行う論理である。それは主体と他者との「和解」や「相互承認」の基礎ともなりうるものである。

● KGU 関内メディアセンター



関東学院大学 KGU関内メディアセンター
 TEL 045-650-1131 FAX 045-650-1132
 〒231-0011 横浜市中区太田町2-23
 (横浜メディア・ビジネスセンタービル8F)

ヘーゲル学会事務局

〒102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1
 法政大学八〇年館文学部資料室気付 (菅沢研究室)

Tel & Fax : 03-3264-4568

E-Mail : hegel-11-12@phs.i.hosei.ac.jp

郵便振替口座 : 00150-1-10718 日本ヘーゲル学会